

ポケットモンスター  $\mu$   
's/Aqours

百鬼神・サバト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ラブライブでかつて今もなお愛されている、μ'sとAquoursがポケモンに登場！どんな作品になるのか?!

# 目次

## 第1章

0話 「冒険の始まり」	1
1話 「ヒトカゲとの出会い タクト の覚悟」	5



## 第1章

## 0話 「冒険の始まり」

—とある日の朝

父「タクトー、支度は出来たかー？」

母「忘れ物ないように確認した？」

—タツタツタ

よし！準備OK、忘れ物は無し。モンスターボールも持ったし、必要な道具もあるな。  
あ、いっけね自己紹介してなかった！俺の名前はタクト。

で、隣にいるのが俺の友達で今日から相棒パートナーのリオルだ。

—リオッ！

これから俺たちは旅に出るんだ！夢はサトシさんみたいなポケモントレーナーになること！一緒に強くなろうなりオル！

—リオリオッ！

おっと、早く下に降りなきゃ！どんな冒険が待ってるかな〜！

—父さん、母さんお待たせ！準備OKだよ！

父「そうか。お前が旅か…。とうとうその時が来たか」

母「本当に大丈夫？まだ16歳なのに1人冒険なんて行ける？」

—母さん心配しすぎだよ。もう16なんだから自分のやりたい事は自分で決めさせてよ。

母「それはそうだけど…。でもね」

父「そうどうぞ母さん。タクトがそう言ってるんだからそう心配するな。それにタクトには俺のルカリオが直々に修行したりオルがついてるから安心しなさい。

何より元リーグチャンピオンの息子なんだから血は受け継がれてるからな！」

—そう。俺の父さんはここ、〈ヘイルダム地方〉の元リーグチャンピオン。とても強かった俺の自慢の父さんなんだ！

でも俺は父さんみたいじゃなくて、サトシさんみたいなトレーナーになりたいって言ったら、父さんのルカリオがリオルを修行してくれたんだ！

母「そうね。ルカリオちゃんがりオルちゃんを修行してくれたから大丈夫よね。でももし何か困ったら直ぐにこのスマホロトムで連絡するのよ。」

—スマホロトム？何それ初めて聞いたんだけど。

父「なに、知らないのか。こうやって電源を入れると…」

—ビビッビビ

「ピコンツ電源ONロト！ボクハスマホロトムロト、よロトしく！」

「うわああ!!スマホが喋った?!どうなってんの？」

母「ロトム居るでしょ？ロトムがスマホの中にいるのよ。」

父「ロトム凶鑑の実用的ver.みたいなもんさ。」

「ビビッポケモン凶鑑モ実用的ロト！ポケモンノ事ナラオ任せロト！ソノ前ニマズアナタチノ事ヲデータニ保存スルロト！」

「データダウンロード中…データダウンロード中…ダウンロード完了ロト！」

オ父サマノリヒト、オ母サマノエシエルソシテ、コレカラ冒険ヲ共ニスルタクト。よロトしく！」

父「スマホロトム、タクトの事をよろしく頼むよ。」

母「タクトを支えてあげてね。」

「パパサン、ママサン任せルロト！タクトヲシツカリサポートスルロト！パパサンママサンノ連絡先ヲ登録済ミノデゴ心配ナクロト！」

「じゃあそろそろ本当に行くね。たまには帰ってくるね。それから毎回メール送るし電話もするよ。」

父「ああ分かった。一番は体に気をつけてそれから、危ない事は絶対するなよいな。」

—分かった約束するよ。

母「寂しくなったらいつでも帰ってきて来ていいのよ。」

—うん。でも直ぐには帰ってこないけど、ちゃんと帰るようにはするよ

—じゃあ、行ってきます！

父母「いつてらっしやい！」

こうして、俺とリオル、スマホロトムの新たな冒険が始まった。でもまさかこの旅が俺の人生を大きく変えるなんてこの時の俺は知る由もなかった……



# 1話 「ヒトカゲとの出会い タクトの覚悟」

〈ウイルダム地方 283道路〉

「さてと、いざ旅に出たのはいいものの、何しようかな。あ、そうだ！ポケモン捕まえよう！」

—リオリオツ！

「リオルにも新しい仲間出来るぞ！良かったな！」

—リオ！

「まず捕まえるポケモンは御三家だ！サトシさんは、御三家をパートナーにしない代わりに手持ちとして御三家をゲットしてたから俺もやりたいんだよね。」

—リオリオリオ？

「えっ？どのタイプのどのポケモンが良いかって？タイプは勿論全部！もちろんどの地方のポケモンも好きだからなく。迷うところではあるけど、やっぱり、全部違う地方のポケモンが良いよね！ほのおタイプは今のところリザードンかゴウカザルかガオガエンが良いなく。」

—リオリオル。

「な？良いだろ！水はエンペルトかダイケンキかゲッコウガかなく？」

ーリオリオ？

「あとはつて？くさタイプはジュカインかブリガロンかジュナイパーだな。」

ーリオリオ。

「えっ？全然決まって無いじゃんつて？しょうがないだろみんな魅力的みりよくてきなんだから！」

ガサガサッ

「ん、なんだ？草むらが揺れてる！ポケモンか!？」

ーカ、カゲエ…

「この鳴き声は?!スマホロトム、頼む。」

パシヤ

ー了解ロト! 『ヒトカゲ、とかげポケモン。ほのおタイプ。しっぽの炎は生まれつき灯っており、炎が自分の生命力と言われている。』

「なるほど。なあロトム、ヒトカゲのしっぽの炎って生まれた時は小さいとかあるのか？」

ーソナナコト無いロト。生マレッツキ大キイロト!

「このヒトカゲ炎すごく小さいんだけど、なんでだろう？ここ最近雨は降ってないし、ましてや今は夏だぞ？可哀想だな…。」

—ピピツ、オヨソ西ニキーロ行クト、ポケモンセンターガアルクト!

「よし、この子を連れていこう。道案内頼む、スマホロトム。」

—オ任セロト!

〈ウイルダム地方 ポケモンセンター〉

「すみません! ジョーイさん!」

ジョ 「どうしたの? タクトくん?」

「さつき歩いていたらこの弱ってるヒトカゲを見つけたんです!」

ジョ 「あら! しっぱの火が消えそうね。急いで診察してみるわ。」

「お願いします!」

—リオ:

「大丈夫だよりオル絶対治るって! 心配してるのか? 偉いなお前は。」

—リオ: リオ!

「よし、しばらく待つてよう。まだそんなに旅っぽいことしてないのにこれか。先が

思いやられるな。」

〜数十分後〜

ウイン

「あ、ジョーイさん! どうですかヒトカゲは?」

ジョ「大丈夫、今は少し元気になったわ。あの子は珍しいタイプの子ね。」

「珍しい？何がですか？」

ジョ「ヒトカゲっていうのはね、生まれつき炎をしっぽに灯して居るんだけど、それは知っているわよね？」

「はい、それは知ってます。」

ジョ「でもね、ごく稀に生まれても炎がちよつとしか無い希少なケースもあるのよ。それがあの子なの。」

「そうなんですね…。」

ジョ「そういえば、なんであのヒトカゲを助けてあげたの？」

「なんでって、困ってるポケモンは絶対助けるんです！俺はそれをやっていたサトシさんみたいになりたいんです！」

ジョ「あら！サトシ君みたいになりたいのね。頑張ってるね。それで、あのヒトカゲさんだけどうする？」

「どうするっていうのは？」

ジョ「あなたが見つつけてあなたが助けたのよ？決定権はあなたにあるわ。あのヒトカゲをどうしたい？」

「俺は…捕まえたいです！最初はすぐにでもサトシさんに追いつきたくて、どんなポ

ケモンでも良いから捕まえて強くなるうと思っていました。でも、そんな事サトシさんにしてなかつたなって今思い出しました。大切なのは、ポケモンを思いやる気持ち。」

ジョ「そうね、人がポケモンと共存するには大事なことね。」

「あのヒトカゲは俺が立派なりザードンにしてみせます！だから俺が貰い受けます！」

ジョ「分かつたわ。でも、まだ休んでるから明日まで待つて貰える？ここは部屋があるからーっ貸すわね」

「良いんですか?!ありがとうございます！」

——こうして波乱の展開で幕を開けたタクトの旅。ヒトカゲを仲間にすることを決意したタクトは今後どんなポケモンを捕まえるのか。次回もポケモンゲットじゃぞ！